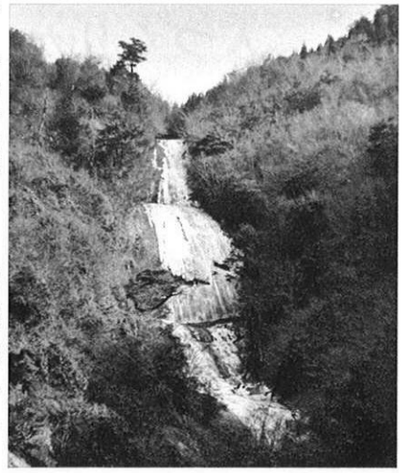
県立公園の周辺 (4)

市房山県立自然公園を探る

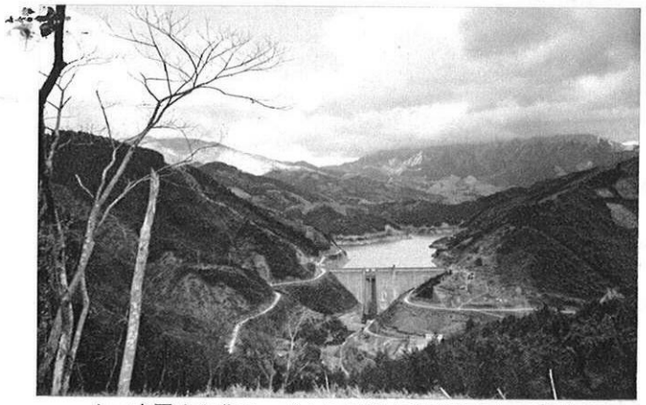
市房山は九州山脈の中では屈指の高峰として岳人に親しまれている。海抜1,722M。東に日向灘、西北に雲仙、阿蘇、祖母などを望み、つつじと新緑、秋の紅葉、冬の霧氷と四季のバラエティも鮮やかだ。

見どころは、水上村にある市房ダムの大湖水での遊覧や魚釣り、市房高原のキャンプ地。ほかに明導寺、市房神社、百太郎溝などがある。

右・市房山には樹齢八百年をこえる大杉をふくむ原始林が多い。



右・水上村古屋敷にある白水の滝。高さ百八十メートルもある壮観さだ。



上・市房山を背に、ダムの周辺は遊覧地として脚光浴びつつある。

上・市房山頂のみごとな霧氷。

上・市房は球磨林業の拠点でもある。

〝マイク〟にかける青春

★菊池郡旭志村
平山香美さん

「KYHK村のニュースです。小原部落では昨日午後二時から、何十年もの昔から伝わっている十五夜の綱引きが行なわれました。直径十㌢の大なわをクラダケ友の会の……」朝六時三十分「村のニュース」の時間だ。KYHKとは旭志村農協有線放送のネームである。この村の有線放送施設は、八年前に新農山漁村建設特別事業として千六十万円をかけて完成し、現在村の殆んどの農家に向けて放送されている。

事業の主体は有線放送電話の運営と線路保守だが、日に四回二十分間番組を自主的に編成している。その一つが「村のニュース」である。子牛のせりの模様や、煙草の集荷量報告などいろいろ。このほかに部落の出来事をつたえる「部落の話題」村や農協のPRコーナーである「農協・役場からのお知らせ」それに「私たちの文芸」といった番組がある。

気にかかる「乳量集計報告」

平山香美さん（二十歳）の家では酪農をやっている。「村のニュース」で牛乳の出荷量の成績をアナウンスする時などついわが家の成績が気にかかる。農協の預託豚の販売頭数や販売金額のお知らせ原稿を見る時もそうだ。平山さんが有線放送の担当をするようになってもう三年になる。放送が少しでもうまくなるように六人の同僚といっしょに、放送用語の勉強や、発音、アクセントの練習にも余念がない。仕事のウエイトからいえば有線放送の電話交換業務が大半だが、番組の放送は役場・農協と農家を結ぶ〝声の接点〟としてかなり重要な機能をもっている。それなりに、番組の編成や内容に対しては、農家生産にプラスするもの、行政や農協の広報に速やかに、正しく役立つものが望まれてくる。平山さんはそういった自覚をいつも確かめることを忘れない。

放送文の作成に工夫

毎年、県有線連絡協議会が行なっている有線放送コンクールの審査基準ではアナウンスと放送文の理解力の二つがあるが、理解力のテストでは、放送文の作成と文章の理解能力に力点がおかれる。平山さんは一昨年のコンクールで晴れの優秀賞に選ばれた。放送文の作成を特に勉強したことが自信を裏づけたという。現在、毎日放送している原稿は、部落通信員から電話で送られてくるものが多い。これをメモしてさらに放送文に組み立てる仕事も勉強のつもりと思えばつい意欲的にもなる。その場合デスクの甲斐さんのきびしい指導が繰り返し行なわれる。

わが家からお叱りの電話も

アナウンス技術はむつかしい。自分の声を録音した番組の放送を勉強のつもりで夜わが家でじっくりきく。道で友だちに会うと「あんたの声、いつもすぐわかるよ」といわれる。放送室で仕事をしていると母親から電話「さっきの交換の態度はよくなかったね。それに読み違いも…。」平山さんは放送技術の研修会へはよく皆と一緒に参加する。相互研修も活発だ。そのたまものでことしのコンクールでは後輩の二人がそろって入賞した。

土曜日の夜は「私たちの文芸」の放送が行なわれる。いわゆる聴取者文芸の時間だ。短歌あり、俳句あり、読書感想文ありそれらを一本の番組にまとめあげて放送する。

「旭志文化の会」はこの番組を中心にした愛好家のグループだが、放送ずみの原稿を収録した文集「麓路」は四号までになった。平山さんこの文集の編集の手伝いや、グループの例会の世話という役目をもっている。なかなか多忙な日常だが、それでも余暇をみつけては同僚たちと旅行に出かけたり、いっしょに音楽を鑑賞したりして若さを楽しむことを忘れない。「お嫁に行くとすればやっぱり農家です」ときっぱり言い切る平山さんはいかにもシンの強さを持った現代的な明るい農村女性を感じさせるのである。

写真は〝火災報知や災害情報連絡など、有線放送の役割は大したものです〟と語る平山さん